

置かれまして、評判よしの御吹聴……」奎平「何や輕業の口上見たいに云ふたんやなア」久七「アノ久七さんと聞きますと、おなつかしふ存じます。ハハン、夫れでは何程想ふてもあきまへんナ、貴女には久七さんと云ふ、可愛^{いと}しいお方が御座りますのやなア。イ、エお話をせぬと解りませんが、私は三年前に一度嫁きました、其夫の名が久七と申しましたが、半年餘りで死別れましたので、死にあとは悪いと云ふ事を聽いて、ヅツと獨りで通して参りましたが、今久七さんと承りまして、思わすお懐かしいと申しました。マア左様かいナ、世には似た名前も有る物だすなア、又用事が有たら遠慮無ふ云ひなはれや云ふて、納屋から出やうとしたら、桶と桶の間が狭い物や依つて、私の尻がボンと衝つたんや、そしたらナ。まア如何に妾のお臀^でが大^いかいて、其様に突かいでも宜えやおへんか云ふて、ポイン（臀で奎平を撥く）と突き返しやがるのや」奎平「顔を皺めて」なる程「久七」私い何も突けしまへんがナ。一寸障た丈けだすがナ。嘘お云ひやす、お突きやしたがナ。觸たんだすがナ。お突きやしたがナ」臀でボン／＼奎平を突き撥ねる）奎平「痛い何するのや人の横ツ腹ボン／＼衝いて。息に關ふがナ、夫れ見い蒲團の外へ放り出しやがつた。ハーツクシヤン。ハーツクシヤン。それ風邪引いたがナ無茶しないナ」久七「アハハ、濟まん／＼。サア此方へお這入り」奎平「私はなア、晩飯の時や。喰べ様と思ふたらお副が晝の残り、若芽のお汁やが私は嫌ひや。晝は子供に揚昆布買ひに遣て濟ましたが女婢は知らん物やさかい、よそふて呉れた。ア、夫れは嫌ひだす云ふたら、向方がテレルやろ思ふて

食べる様な顔して密と横へ置いたら、夫れをジツと見てな、貴方はん味噌^{みそ}のお汁はお嫌ひどすかと訊ねよる。ヘエ奉公して居て好き嫌ひを云ふのは氣儘でムります、が若芽だけは何うしても得^えう頂きまへん云ふとナ、まア妙なこと、妾も若芽は嫌ひどすワ云ふて、私の顔を尻目でジイツと見てなア、似た者何やらどすなアと。オイ。似た者何やらどすなアと。オイ。似た者……」久七「解つたアるがな何遍何ふのやいな同じ事^{こと}を。似た者何やらて、何の事や」奎平「それ見い。解つて無いのやろ、似た者夫婦と云ふ謎を掛けてよるね。見てるちウとな。其お汁を自分が一寸吸ひよるや無いか、貴女嫌ひや云ふて吸ふてなはるやおまへんか。アの若芽のお汁は嫌ひどすのやが、殿達の喰べさしは、どんな味がするかと思ふて、よばれて見たのどすが、嘔吐^{おうと}いたのがお氣に觸つたのなら、貴方のお氣の濟む様に何うなと信濃の善光寺さんは、此間も阿彌陀池に御開帳が、有つたや、無ア一いイーかア一いイーなア一フワ／＼……（久七の顔を掻き抓る）」久七「痛たたた——いた——い」番頭「コレ／＼何してるのや其處で」久七「奎平どんが惚氣云ふて、私の顔を掻き撈らはりまんね」番頭「早う寝んかいな最う」わア／＼云ふてる内に、晝間の疲れでグーツと寝て仕舞ひましたが、夜中に目を醒したのが一番々頭。番頭「ア、アーツ（欠伸）もう何時やろ……ア、左様や／＼、今日目見得に來た女婢……放心^{あんしん}寝惚けて忘れる處やつた、……フ、ン皆よふ寝てよる。此間に往て一談判……」暗闇を手探りで取合ひの障子をスーッと開けて、足音のせぬ様に二階への段梯子を上ると、頭をゴツン。番頭「痛ア……ア、